

第八回国際口承文芸学会

世界大会報告

三宅 忠 明

表記大会が昨一九八四年六月十二日より十七日まで、ノールウェイのベルゲン大学を中心に開催された。合計三十四か国より、二三名の正式参加があり、うち一五二名がシンポジウム(大会ではプリナリー・セッションと呼ぶ)を含めて何らかの形の研究発表を行った。米合衆国からの参加が最も多くて四十一名、ついで地元ノールウェイの四〇名、以下西独の十八名、フランス、フィンランドの十四名、イスラエル、スウェーデンの十一名、ハンガリー八名、デンマーク七名と続き、日本からの参加はカナダと並んで六名であった。

今回の研究発表のテーマは、(一)語り——意味の探求、(二)語り手の問題、(三)語り——アイデンティティの問題、(四)その他(伝説・ことわざ・分類など)の分野に大別されていたが、(一)(三)の分野が圧倒的に多かった。発表はたいい五会場に分れて同時進行し、聴きたい発表が重なった時など(これだけの数があるとはほとんど毎回のた

が)どこにしようかと迷うところだが、今回は事前に発表原稿をすべて提出させ、ゼロックス、コピーによるものだが二分冊からなる大冊子に編集配布したので、その点は大いに助かった。とはいへ、期日までに原稿を提出していたものは全体の六割強にすぎず、かけこみ発表もかなりあったようである。また、せつかく提出していてもあちこちに手を加えたあとが残っていたり、書式の不備があったものもあり、当事者にとつてはいささかあわてる場面もあったに違いない。ともあれ、前回のエジンバラ(一九七九)では梗概のみだったことを考えれば、参加者にとつてはありがたいことであった。個々の発表者およびその内容については、以上の理由に加えて、公正を欠くことになつてもいけないのでここでは詳述をさけるが、印象に残った出来事をひとつ。大会二日目に、他の発表者と同じように普通教室で三十分間(含質疑応答)の時間を与えられていたアラン・ダンデスの発表が直前になって大講堂に変更され、参加者の大半が押しかけたことである。時間も大幅に延長され、発表者も一大講演会となったわけだが、ルール違反はともかくとして、彼の巨人たるさまをまざまざと見せつけられたひとこまであった。(ちなみに、彼のテーマは、「民族的劣等意識とフォーク・ロアの偽造——オシアン、グリム昔話、カレワラおよびポール・バニアン再考——」というものであった)

日本からの参加六名のうち、小沢俊夫(Die Bedeutung des Märchens und des Märchenzählens in der gegenwart Japans) 三宅忠明(The Secret of the Deirdre Legend's Popularity and Its Significance)、百々佑利子(Ethnic Influences on the Con-

cept of Reciprocity—Japanese and Meori Folktales) の三名が発表したが、とりわけ白田甚五郎日本口承文藝學會会長が、研究発表のみならず、総会、市長レセプション、懇親会、その他すべての行事に熱心に出席されていたことは、心強い限りであった。

次に総会の次第および決議事項は次の通りである。大会二日目の六月十三日午後二時三〇分より、同五時十五分まで、ベルゲン大学スチューデント、センターの大講堂において開かれた。

一、ラウリ・ホンコ会長の開会宣言。

二、会長による定数の確認。

三、ホンコ会長を議長に選出。ヘラニン夫人を書記に、W・ニコライセン教授を議事監査役に、R・ポーマン教授を投票役にそれぞれ決定。

四、報告（以下、敬称略）

(1) 現在の会員数、四四一名。うち一二四名は過去五年間（一九七九—一九八四）に承認されたもの。

(2) 過去五年間に物故会員となったもの二十五名。うちキャサリン・ブリッグズ、ヨハネス・クンジグ、エルナ・ポメランゼワの各名誉会員を含む。黙とう。

五、会計および監査報告と承認。

六、会長選挙。

キャサリン・ルオマラ教授の司会により、ラウリ・ホンコ現会長の再選を満場一致で可決。

七、副会長・会計・同監査選挙。

キリル・シストフ（ヨーロッパ）、キャサリン・ルオマラ（南米・太平洋）、アラン・ダンドレス（米合衆国）、ルッツ・ローリヒ（無地区）の四名は満場一致で再選。アフリカ地区からアーメド・モアシーとアデボイ・ババロラ、アジア地区からG・ハッサン・ローケンとトシオ・オザワ（小沢俊夫）の各二名が推せんされ、挙手によりローケンとオザワを選出。

会計はユーハ・ペンティカイネン、同監査にサシー・アポイおよびリンダ・デーグを満場一致で選出。

八、運営委員選挙。

投票により次の通り選出。

T・ドモートル、S・ノーマン、W・ニコライセン。

九、名誉会員。

T・ドモートルを選出（満場一致）。

十、次期大会の開催地および時期の決定。

米国フォークロア学会（合衆国東地区）、カイロ（エジプト）、ブダペスト（ハンガリー）が立候補。投票により、ブダペストにおいて一九八九年開催と決定。補欠地はカイロ。

十一、会費。

現行の年三米ドルを据え置き、五年分とし十五米ドルを徴集することに決定（満場一致）。

十二、特別調査委員会。

G・ブロンジーニ、L・デーグ、V・ゴログ・カラデイ、J・ハンドウー、B・ホルベック、H・イアンソン、V・ニーウエル、L・ペトゾルト、L・ドリッヒ、V・ポイト、D・ウォードに委任。

十三、今大会組織委員会に対する謝辞。

(K・ルオマラ副会長)

十四、次期大会開催地代表あいさつ。

(V・ポイト教授)

十五、閉会宣言。

(会長) 一九八四年六月十三日午後五時十五分。

大会の運営全般に関しては、非常に分りにくいプログラムの作成、フィヨルド見学旅行の日の昼食が三時間も遅れる、などといった不備はあったが、人口わずか二十万のベルゲンが、大学と町をあげて、これだけの国際学会をやりとげたことは驚嘆に値する。ノールウェー第二の都市とはいえ、首都オスローとは陸路で十時間近い^{ほど}距離がある。文学通り陸の孤島と呼べるような土地柄である。しかし、このことが旧知の外国人研究者と旧交をあたため、刺激や情報を交換し、新たに多くの研究仲間を作るといふ国際学会のメリットを防げるものはいささかもない。最後に、閉会后オスローに向う帰途の思い出を一首。

氷河をば はるか眼下にながめつつ

白夜の中を わが汽車は行く

(みやけ ただあき・就実女子大学)